

*当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と多元的社会」
(平成 25 年度第 1 回研究会)

日時：平成 25 年 7 月 21 日（日曜日）13 時より 18 時

場所：AA 研大会議室(303)

報告要旨

1. 松尾有里子（AA 研共同研究員，お茶の水女子大学リーダーシップ養成研究センター）

「17 世紀オスマン朝治下のボスニア地方社会——モスタル法廷の事例を中心に」

本発表では、16 世紀中葉から 17 世紀後半に作成されたイスラーム法廷台帳をもとに、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ地域のモスタルにおける、法廷の社会的機能と性格を検討し、中央集権化の進むオスマン司法行政の一端を明らかにすることを目的とした。¹

法廷台帳の文書は、証書(hüccet)、勅令(ferman, emr-i şerif)、勅許状(berat)、命令書(buyuruldu)イスラーム法官発行の書簡類、書き付け(tezkire)からなり、イスラーム法官の判決を含むイスラーム文書は含まれていなかった。これらの内容によると、1632 年から 1764 年までの間にイスタンブルからモスタルに派遣されたイスラーム法官は 3 名で、その代理(naib)4 名が管轄下 14 の村々との連携役として職務を分担していた。当事者や証人として出廷した人物をみると、ムスリムが 251 名、非ムスリムが 84 名利用していたのがわかる。その内容は遺産相続、婚姻、不動産、動産売買、金銭貸借、官職の任命、後見人契約、ワクフ、代理人契約、勅令と行政関連文書と多岐に亘っていたが、このうち、もっとも多いのが婚姻と遺産相続に関わる案件であった。

婚姻関連の記録からは、幼児婚は認められず、女性の大半が初婚で、ウラマーの家系に同族婚が比較的多い等の特徴が認められた。一方、遺産相続に関しては、詳しい遺産目録と、相続財産の内訳と総額が付記されていた。これら当事者の大半がオスマン支配層に属していたが、この顔ぶれからモスタルで徐々に改宗ムスリムの家系が出現していた可能性が窺える。例えば、婚姻契約者 15 名の父がすでに改宗ムスリムで、ムスリムの女性を妻としている点、また契約を通じて新たに 2 名がカトリック教徒からムスリムになっている点等から指摘できよう。なお、これら法廷台帳の婚姻契約に見るイスラームへの改宗は、カ

¹本発表で使用した台帳は、イスタンブルのイスラーム研究センター(ISAM)にマイクロフィルムとして所蔵されている三冊で、もっとも古い記名のある第一冊(H.1041-1043)(1632-1634)123 頁、第二冊 H.1080-1081(1144-1145)、H.1092-1096(1681-1685)17 頁、第三冊 H.1144-1145(1731-1733)、H.1177(1763-1764) 37 頁からなる。また 16 世紀中葉のボスニアにはサライエヴォに大都市のイスラーム法官区がヘルツェゴヴィナ地域のモスタルには小都市のそれが設置されていた。

トリック人口の多いクレタ島の17世紀末期の台帳にも顕著に認められており、興味深い。

一方、勅令、命令書、勅許状等の検討から、モスタルのイスラーム法官がバルカン全土、もしくは他のボスニア・ヘルツェゴヴィナ地域の法官たちと協同して徴税業務をはじめ異教徒対策、軍人や官僚、ウラマーの任命等の諸業務に関わり、軍事以外の地方行政に幅広く携わっていたことがわかる。つまり、16世紀中葉以降、バルカンの司法行政の中央集権化は、ボスニアの地方都市モスタルまで及んでおり、モスタルは一司法行政区として地方統治の一端を担っていた。

以上から、モスタル法廷は当該地域のムスリム、非ムスリムが主に権利の確認、結婚、遺産相続等の契約や登記目的で利用し、オスマン帝国治下の司法組織として認知され、社会に定着していたことが理解できる。また、これらの記録から、当時、モスタルで婚姻を通じた改宗が進み、新たなムスリム家族の形成と支配層が生まれていた事情が読み取れた。これらがモスタル固有の事情なのか、また、当時進行していたバルカンのイスラーム化とどう関わるのかについては、今後の課題としたい。

2. 磯貝健一(AA 研共同研究員、追手門学院大学)

「カーディーとタズキラ

ーロシア領中央アジアのシャリーア法廷裁判文書の作成過程ー

ロシア当局は、帝国領トルキスタン地方のシャリーア法廷を対象として様々な改革を実施した。なかでも、シャリーア法廷を主宰する民間判事(ロシア語: narodnyi sud'ya, 現地語: qāḍī)に、法廷で作成される証書(wathīqa)と判決(hukm)各々の台帳作成を義務付けたことは、民間判事を通じてシャリーア法廷を掌握しようとするロシア当局の意思を物語るものといえよう。換言するならば、ロシア統治下のシャリーア法廷において、民間判事(以下、現地語文書の呼称に従い「カーディー」と呼ぶ)は法廷業務の全領域を文書化する義務を負っていたことになる。

このようなカーディーの在り方を反映するものとして、当時のシャリーア法廷裁判の過程で作成された「タズキラtadhkira」という文書の存在が挙げられる。タズキラは裁判の審理過程で当事者たる原告ないし被告に交付された文書で、そこには文書発行時点までの審理の経過が記録されているが、台帳記載の判決文内で言及されることはない。また、タズキラはムフティーがファトワー(法鑑定文書)を作成する際の参考資料としての役割を担っていた。じつは、このような文書はロシア統治期になって初めて現れる。

タズキラは裁判期間中、各回の審理が終了した時点で発給されたが、このことは、カーディーの手許にタズキラの原簿たる「審理記録」が存在していたことを想定させる。この「審理記録」は、判決台帳に記載される判決文の原簿ともなっていたはずである。

3. Mansur Sefatgol (Visiting Professor, ILCAA/ University of Tehran)
**Persian Historical Writing in Central Asia During the Transitional
Period: A Case Study of the Early Manghit History of *Tuḥfat al- Khānī*
(*Tārīkh-e Raḥīm Khānī*)**

The Persianate societies have a strong tradition of historical writing and produced many chronicles. One of the main centers of Persian historiography was and even is Central Asia. In fact, the early types of Persian histories emerged in this region during the early Islamic centuries. This process continued through the centuries, and many Persian histories had been written by the court historians of the Central Asian Khanates even after the political changes from the 16th century onwards. One of the most notable examples is *Tuḥfat al-Khānī* written by Qāzī Muḥammad Vafā Karmīnagī during the reign of the Muḥammad Raḥīm Khan, the first Manghit ruler of Bukhara. Although some sources on the history of Manghit Khanate have been edited and published, it is strange that no one has prepared a critical edition of *Tuḥfat al-Khānī*, the main source on the establishment of the dynasty and its early rule.

This work covers the rise and the establishment of the Manghit dynasty as well as the political situation of Central Asia after the dismissal of the Abū al-Fayz Khān, the last Janid Khan of Bukhara. The work has two main sections: The first section, the main body of book, covers the events in the establishment of the Manghit dynasty, its relation with Iran during the Nadir Shah period, and the last days of the Muḥammad Raḥīm Khān life. The second section was added to the main body ten years later by another author during the reign of Daniyāl Bay, the Muḥammad Raḥīm Khān's successor. This presentation aimed to introduce the main Manuscripts of this book and evaluate its importance for the historical studies.